

◎ 解答は解答用紙に書くこと。(氏名は書かないこと)

字数制限のあるものは、句読点などの記号も字数に含む。

一

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

受 験 番 号

さんまさんは、誰かが話を始めると、必ずそちらのほうを向いて、「ふん、ふん」と相づちを打ちはじめ。さんまさんが司会のテレビ番組を見てると、それがよくわかる。

さんまさんは、とにかく相手の目をじっと見つめながら話を聞く。

( A ) これが、好かれる理由の一つになっていると思う。

① 人の話を聞くときには、相手の目を覗き込むようにするとよい。

これは、さんま流の「聞き方の極意」であるが、好印象を与えるやり方でもある。

カナダにあるトロント大学のラルカ・ペトリカンが、40組の夫婦について調査したところ、「お互いに目を見ながら話す」夫婦ほど、お互いの関係に満足する割合<sup>a</sup>が高かったという。相手の目を見ながら話を聞く、ということを中心に心がけるだけで、人間関係は円満になるのである。

話を聞くときには、そっぽを向いてはいけけない。【 I 】「そんなことをすると、「私はあなたに興味がない」とか、「あなたの話はタイ屈<sup>b</sup>でしかたがない」というサインを相手に伝えることになってしまう。

ビジネスのマナー本などを読むと、

「相手の目を見つめるのはルール違反」<sup>②</sup>

「ネクタイの結び目あたりに視線を置くのが正解」

などと書かれていることがあるが、それはまったくのウソである。【 II 】 話の聞き方に関しては、さんまさんのように、「ほう、ほう、それから、それから」と相づちを打ってあげて、相手の目をしっかり見つめるようにしましょう。ただそれだけで、みなさんは聞き上手になれる。

どんなにつまらない話であっても、乗り気でなくとも、相手の目を見つめることは重要である。頭の中で違うことを考えていてもいいのだ。

相手の目をしっかりと見つめていれば、相手は満足してくれる。

私は、人の話を聞くのが苦手なので、相手がしゃべっている内容は、ほとんど耳に入っていない。次に自分が何を話そうかということばかり考えてしまう。にもかかわらず、私もさんまさんと同じように、あまり人に嫌われることはない。それというのも、さんまさんと同じように、話をしている人間の目をしっかりと見つめて、「へえ、そうなんだあ」と相づちだけはしっかりと打っているからである。

( B ) 日本人には内気な人が多いので、相手の目を見つめるのにためらいを感じる人が多いかもしれないが、これは訓練でどうにでもなる。

いまずぐにはムリかもしれないが、話をするときには、意識して相手の目を見る努力をしよう。そういう努力をすれば、早ければ3週間ほどで、相手の目を見つめていても、苦痛を感じなくなる。

【 III 】 たったこれだけでもきちんとできるようになると、驚くほど自分の好感度をアップさせることが可能になるのだ。

さんまさんの話の聞き方には、もうひとつ特徴がある。それは、ゲストが話しはじめると、必ず「身を乗り出す」ということだ。

何人かのタレントが椅子に座ってトークをする番組があるでしょう。このような番組をじっくり観察してみると、さんまさんだけが、他のタレントよりも上半身を机の上に乗れ出すようにしていることに気づくと思う。さんまさんは、前傾姿勢をとっているのだ。

さんまさんが立ったままで司会を行うときには、もつと顕著である。

ゲストが何か面白いことを言うと、さんまさんは「身を乗り出す」どころでなく、その人のほうに向かって、「歩き出す」ことをさせている。

人の話を聞くときには、とにかく「身を乗り出す」ことが重要である。

さんまさんは、意識してか知らずか、これを実践しているのだ。

オハイオ州立大学のマイケル・ラクロッセによると、人の話を聞くのが仕事のカウンセラーにおいて、「前傾 20 度で、身を乗り出して聞く」カウンセラーのほうが、「後傾 20 度で、身体をのけぞらせるようにして聞く」カウンセラーよりも、相談にやってきた人物から、はるかに好かれるということを実験的に確認している。

この実験では、「身を乗り出す」カウンセラーと、「身をのけぞらせる」カウンセラーでは、魅力のド合いに約 2 倍の差がつけられたと報告がなされている。

相手が話をしているときには、「乗気」であることを示そう。  
それが、相手を喜ばせるポイントである。

そして、「乗気」であることを相手に伝えるのに、もつともコウ果的なやり方は、実際の姿勢として、「乗り出してみせる」ことが重要なのだ。身体が前へ出て行けば、それだけ自分が「乗気」であることを示せるのだから。

料亭や旅館の女将さん、( ) C ( ) ホテルマンなどは、お得意さまのお客を迎えるときに、玄関の外で待つ。そして、お客がやってくることに気づくと、お客のほうに向かつて二、三歩、前へ出る。俗にいう「出迎と三歩、見送り七歩」というやつである。

お客は、そんな女将やホテルマンの姿を見て、非常に嬉しくなる。自分のほうに向かつて「身を乗り出してくれた」ということで、自分を心から迎え入れてくれていることがわかるからだ。【 IV 】

会話上手は、「身の乗り出し方」がうまいのである。

そして、芸能人でそれを実践しているのが、さんまさんだ。

会話における「身の乗り出し方」を学びたいのであれば、さんまさんがゲストの話を聞いているときに、どうやって上半身を乗り出しているのかをカン察してみればよい。そしてその姿勢を自分でも真似してみればよい。

さんまさんは、誰かが面白いことを口にする時、後ろにのけぞるような姿勢をとることもあるが、すぐに上半身を前に戻して、「 X X 」。こういう姿勢を自然にとれるところも、さんまさんの魅力のひとつなのであろう。【 V 】

(内藤 誼人『なぜ、明石家さんまは「場を盛り上げる」のがうまいのか?』より)

問一、傍線部 a～d のカタカナと同じ漢字を使う熟語を、それぞれア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |                  |        |       |       |        |
|------------------|--------|-------|-------|--------|
| a 「 <u>下合</u> い」 | 「ア 下器  | イ 温下  | ウ ド号  | エ 井ド   |
| b 「 <u>タイ</u> 屈」 | 「ア タイ空 | イ タイ面 | ウ 引タイ | エ 戦タイ」 |
| c 「 <u>カン</u> 察」 | 「ア カン迎 | イ カン動 | ウ カン西 | エ カン光」 |
| d 「 <u>コウ</u> 果」 | 「ア コウ動 | イ コウ角 | ウ コウ率 | エ コウ校」 |

問二、( A ) ( ) ( C ) に当てはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア そして イ なげなら ウ なお エ つまり オ あるいは

問三、傍線部①「人の話を聞くとき」において筆者が大切だと考えているものは何か。次のア～オの中から二つ選び記号で答えなさい。

ア 我慢 イ 想像 ウ 視線 エ 理解 オ 姿勢

問四、傍線部②「違反」の対義語を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 規範 イ 模範 ウ 順守 エ 普通

問五、傍線部③「それ」とは何を指すか。「こと」につながるように本文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

問六、傍線部④「相手を喜ばせるポイント」にあたる行動を、本文中から漢字四字で抜き出しなさい。

問七、傍線部⑤「出迎え三歩、見送り七歩」の説明として最も当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア お客様の出迎えでは三歩下がり、見送りでは七歩前に出ることで、深い感謝の気持ちを具体的に現す接客の大切な心得。  
イ お客様の出迎えでは三歩踏み出し、見送りでは七歩前に出ることで、おもてなしの心を具体的に現す接客の大切な心得。  
ウ お客様の出迎えでは三歩踏み出し、見送りでは七歩前に出ることで、すみやかな対応を具体的に現す接客の大切な心得。  
エ お客様の出迎えでは三歩下がり、見送りでは七歩下がることで、慎ましやかな気持ちを具体的に現す接客の大切な心得。

問八、「 X 」に当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 身をのけぞらせる イ 身を投げ出す ウ 身を乗り出す エ 身を削る

問九、この文章には次の一文が抜けている。この一文を入れるのに最適な箇所を、本文中の【 一 】 【 二 】 【 三 】 【 四 】 【 五 】の中から一つ選び記号で答えなさい。

とにかく、会話中に相手の目をしっかりと見つめること。

問十、本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 人の話を聞くときは、どんなにつまらない話だとしても、楽しそうに相づちを打つことが大切である。  
イ 人の話を聞くときは、身をのけぞらせるようにして、「乗気」であることを示すことが大切である。  
ウ 人の話を聞くときは、相手の話を聞きながら、次に自分が何を話そうかと考えることが大切である。  
エ 人の話を聞くときは、相手の目を見つめ相づちを打ちながら、身を乗り出して聞くことが大切である。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

学校で友達関係がうまくいっていないなかった美輝は、検査に行った病院の屋上で井之尾という老人と偶然出会った。そして、井之尾から「春を感じるものを見つけて写真に撮ってきてほしい」と頼まれた。はじめはあまり気がすまなかったが、老人は美輝が撮ってきた写真を見て涙を流して喜んでくれた。

美輝は、( A ) いい写真を撮ろうということにだけ集中していた。病室にいた老人たちの会話から、それぞれがどういものに関心があるのかも少しだけわかった。

自分のしたことを心から喜んでくれた彼らのことを、もともと喜ばせたいと心から思った。

美輝は前日以上に、いろんなところを歩き回り、たくさんの写真を撮った。( B )、これほど歩いたのは初めてだろうが、あまり疲労を感じなかった。<sup>①</sup>美輝は撮った写真の下にちょっとしたコメントをつけて再び病院を訪れた。

この頃から、美輝は井之尾に対して、他の誰に対しても感じることもなかった安心感を持ち始めていた。

どんな秘密を打ち明けても、自分が関わって生きている他の人にその秘密が漏れることはないという安心感。そして、きっと井之尾なら、他の大人のようにすぐに話を途中で遮って「ああしなさい、こうしなさい」なんて言わずに自分のことを受け止めてくれる。そんな気がした。

病室にいた人たちはみな前にも増して喜んでくれた。

それぞれが気に入った写真を枕元に飾り、これで気分が晴れると言っては「ありがとね、美輝ちゃん」と言ってくれた。

「写真を撮るのが楽しくなってきたかね？」

「うん。どんな写真を撮ったらみんなが喜んでくれるかなあって考えながら写真を撮るのは、本当に楽しかったわ。そのことを考えているときは嫌なことを忘れることもできるし」

「目の前にあるものを見て、誰かの喜ぶ顔が浮かぶ人は、何をやっても成功する人じゃよ」

美輝は素直に嬉しそうな顔をした。

「本当じゃ」

「ああ本当じゃ。どんな仕事をしていても、自分にとって嫌なことや退屈なことはある。そういう人にとっては仕事そのものが作業であり、苦痛になる。ところが同じことでも誰かの顔を思い浮かべながら、その人に喜んでもらえるようにと考えながらやると、そのことは努力や苦労ではなくなる。その人にとって楽しくてたまらん時間になるんじゃない」

「確かにそうかもしれないわ。時間を忘れて写真を撮っていたもの」

「そうかい。それはよかった。今やお前さんは我々六人の心を癒してくれる専属カメラマンじゃの」

「そう言われると、( C ) 嬉しいな。もともと撮りたくなつちやう。また撮ってきてもいいっ」

「もちろんじゃよ。それより、ちょっと話を聞かせてくれんかね。写真を撮っていて何か気がつくことはなかったかい？<sup>②</sup>」

「そうだなあ。やつぱり嫌なことを忘れて集中することができたってことかなあ」

「他にはないかい？」

「そうね、あとは……春らしいものを探して歩いていると、春らしいものって結構いっぱいあるってことね」

井之尾は満足げにうなずいている。

「そのことがわかったじゃろ？」

「えっ」

「お前さんが春らしいものを探して歩いていると、道は春らしいものであふれていることに気づくじやろ。ところがお前さんが歩いた道は、初めて歩くような外国の道じゃない。いつもお前さんが歩いている道じゃ」

いつも歩いている道に、お前さんに春を感じさせるものがこんなにあふれているってことに以前は気がついていなかったかな」

「ううん。気がついていなかったわ」

「人間は、自分が探しているものしか見つけることができないんじゃないよ」

「自分が探しているもの……っ」

「そうじゃ。春を感じるものを探して歩いている人には、春を感じさせるものがドンドン目に飛び込んでくる。ここにいる六人の老人を楽しませる景色を探して街を歩くと、そういうものがドンドン目に飛び込んでくる。ところがまったく同じ道を歩いても数日前のお前さんにはそういうものは一切目に入らなかった。ちがう

かなっ」

「……」

美輝は言葉<sup>④</sup>を失った、井之尾の言う通りだった。

美輝が春を見つけるために歩いた道は、あの日検査のためにこの病院まで歩いてきた道と同じだ。でも、あの日はそういうものが一切目に入らなかった。花がそこにあることすら気づかなかった。

「つまりそういうことじゃ。お前さん、私と出会った日、この病院の屋上で何を考えていた？ きつと自分がいかに不幸で恵まれていないかということばかりを考えておったはずじゃ。そういう者は、出会うものの中で自分に不幸を感じさせるものばかりしか目に入らなくなっている。

自分を不幸にするどんな些細な<sup>さいさい</sup>ものも見逃さないほど敏感になってそれを捕まえようとしておる。結局、自分の方から積極的に自分を不幸にするものを集めて生きているということなんじゃよ」

美輝は認めるしかなかった。井之尾の言う通りだ。

「うん……確かにその通りかもしれない。実際に私、あの日は自分のことばかり考えていて、家から病院までの道はたに何があつたかなんて何一つ覚えていないもの。でも、井之尾さんたちを喜ばせるものを探して歩いているといろんな発見があつたし、楽しかった……」

「そうじゃろ。世の中のあらゆることがそうじゃ。自分を幸せにしてくれるものばかりを探して生きる者に、不幸な出来事なんて見つけることはできんじやよ」  
「待って。そんなことないわ。確かに、自分を幸せにしてくれるものを探していれば、それがたくさん見つかるというのは納得できるけど、それとは無関係に私の周りでは、無視したくてもできないような、起こってほしくないことがたくさん起こるもの」

「なるほど。確かにそうかもしれん。だがの、それでも起こっている出来事によつて、それがいいことか悪いことかが決まっているわけではないのは事実じやよ」  
「そんなことつて……」

「ある人が何かで悩んでおるとする。その人は、自分を取り巻く状況や他人が、こう変わってくれたら幸せになれるのに……と思いつつおるんじや。ところが三年後、その人が同じことで悩んでいると思うかね？ ほとんど例外なく、もう悩んでなんかはおらん。つまり、本人の希望<sup>かな</sup>が叶つたことじやな。そこで考えてみる。その人は三年後幸せの絶頂にいると思うかね？」

「――――」  
「どうしてだね？」

「別のことで悩むから」

「その通り。この人は今抱えている悩みが解消されれば幸せになれると思つておる。でも、それが解消されたところで別の悩みを抱えてしまふ。どうしてかわかるかい。

人が幸せを感じる力つていうのは決まつておるからじやよ。

ある人は自分の周りで百の出来事が起こるとすると、そのうち幸せだなあつと感じることが十くらいで、嫌だなあつと感じることが三十くらい。残りの六十は別に何とも思わなかつたりする。でもな、まったく同じ出来事を別の人が経験すると、その数の割合は変わる。中には幸せだなあと感じる数が百の人だつておるんじやよ。

この、自分が持っている幸せの感じ方を変えないかぎり、この人は何年たつても同じような気持ちで生きることになる。もちろん抱えている悩みそのものは変わつていくがの。

⑥「どんなことが起こつても幸せだなあつて思える人なら、何年たつてもずっと幸せなまま。人生はバラ色じや。わかるかい？」

「わかるわ。わかるけど……わかるけど……私にはとてもそんな……」

「大丈夫じや。誰だつてできる。現にほら、お前さんは道を歩くのが楽しくなつたじやろ。今まで何も感じなかつた道の中に、見つけて嬉しくなるような発見をするようになったじやないか。ここに喜んで写真を持ってきてくれる姿を見ると、とても学校に行けなくなった子には見えないよ」

「私……私、変わるかなあ……」

美輝は（ D ）涙がこぼれた。

「何を言つておる。もう変わったんじやよ」

「ほんとに？」

「ああ、私と初めて会つた日に私が言つただろ。あの日がお前さんのコハルビヨリになるだろうつて」

「コハルビヨリ……？」

「心が晴れる記念日、心晴日和じやよ」

この瞬間、美輝の感じていた井之尾に対する「――」は確信に変わった。井之尾は美輝にとつてこの世の中でただ一人の何でも相談できる存在<sup>⑦</sup>になった。どこにも居場所がないと感じていた世界の中に、一つだけできた安心して自分が自分でいられる場所<sup>⑧</sup>。

出会つて数日しかたつていない老人の病室という、数日前までは考えられないような場所だが、美輝にとつてはあたたかい光に包まれた唯一<sup>⑨</sup>の、そして大切な場所<sup>⑩</sup>だった。

問一、 ( A ) ( B ) ( C ) ( D ) に当てはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア きつと    イ 思わず    ウ 確かに    エ もっと    オ なんだか

問二、二重傍線部 a～d の「の」のうち、用法の異なるものを一つ選び記号で答えなさい。

問三、傍線部①「あまり疲労を感じなかった」とあるが、その理由として当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 普段はあまり歩かないので体力が余っているから。    イ 老人たちが喜んでくれるいい写真を撮ることだけに集中していたから。

ウ いい写真を撮るためには疲れたなんて言っていられないから。    エ 今の美輝にとって写真を撮ることだけが唯一の趣味だから。

問四、傍線部②「写真を撮っていて何か気がつくことはなかったか？」とあるが、井之尾が美輝にこのように聞いたのは、美輝にどのようなことを伝えたかったからか。本文中より三十文字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

問五、傍線部③『……………』とあるが、この時の美輝の気持ちとして当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 喜び    イ 怒り    ウ 悲しみ    エ 驚き

問六、傍線部④「言葉を失った」とあるが、同じ意味で使われる表現を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 息をのんだ    イ 色を失った    ウ 鼻を明かした    エ 肝をつぶした

問七、傍線部⑤「無関係」のように、「無」をつけてできる熟語を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 可能    イ 関心    ウ 公開    エ 開発

問八、「一」に当てはまるものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 私には分からないわ    イ もちろんそう思うわ    ウ そんなことないと思うわ    エ どちらでも一緒でしょ

問九、傍線部⑥「どんなことが起こっても」わかるかい？」に使われている表現技法を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 擬人法    イ 倒置法    ウ 直喩(明喩)    エ 隱喩(暗喩)

問十、「一」に入る語句を本文中から抜き出しなさい。

問十一、傍線部⑦「存在」と同じ構成の熟語を、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 異国    イ 永久    ウ 植樹    エ 主従

問十二、傍線部⑧「美輝にとつては」場所だった」とあるが、その理由を次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア どこにも居場所がないと感じていた世界の中に、一つだけできた安心して自分が自分でいられる場所だから。  
イ どこにも春はないと感じていたけれど、春を見つけるために歩いた道は、夢や希望を感じられる場所だから。  
ウ 友達はいなくても井之尾たちがいるので、本当の幸せを見つけて力強く生きていくことができる場所だから。  
エ どんなに大きな悩みを抱えていても、三年たったら例外なく悩みはなくなると知ることができた場所だから。

### 三 次の各問いに答えなさい。

問一、次の文の傍線部で使われている敬語の種類は何か。A 尊敬語    B 謙讓語    C 丁寧語から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① どうぞお召し上がりください。    ② お客様がいらつしやいました。
- ③ こちらでお伺いします。    ④ 明日の天気はくもりです。

問二、次の空欄に入る副詞を後から選んで記号で答えなさい。

- ① 彼に限って、( ) 失敗することはあるまい。
- ② この分だと( ) 雨が降るだろう。
- ③ やるべきことはやったので( ) 負けても悔いはない。

ア どうか    イ まさか    ウ おそろしく    エ たとえ    オ まるで

問三、次の各文から主語をそれぞれ抜き出しなさい。

- ① いつものようにぼくはグラウンドで仲の良い友達と野球をする。
- ② 彼の家にいる犬はとても大きいが、どんなことがあってもまったくほえない。
- ③ 先月受けた漢字検定でこのクラスでは私だけ二級に合格した。